

[講演解説]

ミロラド・ラドヴァノヴィッチ氏の講演会に寄せて

野町 素己

2013年3月22日(土)、早稲田大学早稲田キャンパスにて旧ユーゴスラヴィアを代表する言語学者の1人で、世界的にその名前を知られるミロラド・ラドヴァノヴィッチ (Milorad Radovanović) 教授の講演会が行われた。ラドヴァノヴィッチ氏はセルビアのノヴィ・サド大学で長年教鞭をとられる傍ら、2003年からはセルビア学士院の通信会員、2012年からは正会員となり、これまで学士院が組織する様々なセルビア語研究のプロジェクトに指導的な立場として関わっている研究者である。今回は、北海道大学グローバルCOE「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」(代表：岩下明裕)における共同研究のために来日され、東京での滞在を機に本講演会を組織することになった。ラドヴァノヴィッチ氏の訪日は二度目で、前は1982年の第13回国際言語学会議に出席するために来日されたとのことなので、実に三十余年ぶりの再訪である。

ラドヴァノヴィッチ氏は、パヴレおよびミルカ・イヴィッチ両氏が中心となって発展した構造言語学の所謂ノヴィ・サド学派で研鑽を積んだ研究者である。氏の学術的関心の幅は非常に広く、師であるミルカ・イヴィッチ同様、現代セルビア(・クロアチア)語文法・意味論研究、一般言語学で大きな業績をあげておられ、その数は単著が9点、翻訳・編著書が17点、論文や書評など合わせると230点を超えるなど、実に膨大である。なかでも、特に重要なのはラドヴァノヴィッチ氏の社会言語学における業績である。1960年代に西側諸国で研究が本格化した社会言語学を、旧ユーゴスラヴィアの文脈で発展させたことは、ラドヴァノヴィッチ氏の大きな成果であり、1978年に出版されたその著書 Sociolingvistika (社会言語学)は現在も版を重ねており当該領域の古典的な著作として広く参照されている。さらにセルビア(・クロアチア)語を題材とした研究成果を西側世界でも数多く発表し、高い評価を得ている。尚、2010年までの全業績はラドヴァノヴィッチ氏の生誕65年記念号となった Zbornik Matice srpske za filologiju i lingvistiku LV/1 に掲載されているので、関心のある読者は参照していただきたい。¹

今回の講演「今日のセルビア語：主要な論点」では、旧ユーゴスラヴィア解体と連動して4つの言語(セルビア語、クロアチア語、ボスニア語、モンテネグロ語)に分化した旧セルビア・クロアチア語のうち、主にセルビア語を題材に、1)言語状況、2)言語政策、3)言語計画、4)言語の層別、5)言語接触、6)言語の相互作用という6つの視点(領域)から多角的に論じるものであった。言語の実態や変化の正しい理解には、言語内的側面と言語外的側面の両面からのアプローチが極めて重要であることが再確認され、言語構造の

研究から社会言語学まで幅広くかつ深い専門知識に裏打ちされたラドヴァノヴィッチ氏ならではの興味深い講演であったと言えよう。ただ、ラドヴァノヴィッチ氏は自らがセルビア語を母語としており、旧セルビア・クロアチア語の崩壊の観察者である。また本人の意思に関わらず、ある意味その分化過程に積極的に関わる立場でもある。したがって、講演では必ずしも客観的に論じられているとは思えない箇所もあったが、それもセルビア・クロアチア語問題の複雑さと、セルビア語研究者の一つの可能な立ち位置を改めて知る機会を与えることになったとも言えるだろう。

尚、本講演会の組織に際し、特に長與進（早稲田大学）、中島由美（一橋大学）両先生からご助力を賜った。また、講演原稿の英文校閲は、米国における南スラヴ諸語研究の権威であり、2011年に本会で講演をされたウェイルズ・ブラウン（Wayles Browne）教授（コーネル大学）がお引き受け下さった。この場をお借りして各氏にお礼申し上げる。

【註】

¹ http://www.maticasrpska.org.rs/stariSajt/casopisi/filologija_55-1.pdf